

インドゾウの蹄病に対する新しい治療の試みの経過報告

○木戸伸英¹⁾、田中宗平¹⁾、近江谷知子¹⁾、庄子泰之¹⁾、先崎優¹⁾、半澤紗由里¹⁾、
安藤正人¹⁾、大崎智弘²⁾、畑井仁³⁾、三好宣彰³⁾、一二三達郎³⁾、鈴木尚美⁴⁾、川上茂久⁵⁾

(¹⁾横浜市立金沢動物園、²⁾鳥取大学共同獣医学部、³⁾鹿児島大学共同獣医学部、

⁴⁾(株)河野製作所、⁵⁾群馬サファリパーク)

飼育下のゾウは足に関連した疾患が多いことが知られている。50%以上の飼育下ゾウが足の問題を有しているとの報告がある。特に蹄の病変については積極的な治療が推奨されており、患部に対しては壊死組織の除去や足浴に加え、硫酸銅、ナフテン酸銅、あるいはホルマリンの塗布が勧められている。

金沢動物園で飼育するインドゾウ（メス、39歳）は、2011年5月に初めて左前肢第2趾の蹄壁にひび割れが確認された。その後、ひび割れ周囲を削蹄し対処してきたが、2014年2月に蹄底にカリフラワー状の肉芽様組織が確認された。この病変に対して既存の報告にある治療法を行ってきたが、病状に改善が認められなかった。そこで、新たな治療法を検討し試行する必要に迫られ、2016年11月からモーズペーストを用いて患部を化学的に固定する治療、および超音波カッターを用いた患部の切除、削蹄を行う治療を開始した。治療開始後、患部の肉芽様組織の焼灼と切除が順調に進められるようになったが、患部が想定以上に広範囲に及ぶことが確認され、現在治療は進行中である。今回は2017年6月までに行った治療について経過報告する。